

# 自閉症状を示した障害児の学校適応 に関する追跡研究 II (3)

— 自閉症状の消失した障害児について —

竹花正剛・近藤明子・井口裕子・長 藤利・古賀靖之  
柴 勝代・高杉紀久子・池 弘子・小林重雄

注1)

## I 目 的

本研究はインテーク時に自閉症状が問題となったが、その後の指導経過の中で自閉症以外の児童であることが明らかになった症例についての追跡研究である。

自閉症児の治療教育の目標を小林(1977)は、同一年齢、同一学年の一般の集団に適合し、その集団の中で適切な役割を得て、行動できるようになるために、援助することであるとしている。Eisenberg & Kanner(1956)、Brown(1963)、Creak(1961)、Rutterら(1965, 1967)は、学校教育が自閉症児の発達に及ぼす影響及び効果について記述した。我が国においても、教育現場からの実践研究(内堀, 1968; 横沢, 1968)、自閉症児の学校教育における教育の可能性、教育条件、教育方法、予後等の諸問題の検討(若林・石井, 1969, 1970; 若林・水野, 1975)及び実態調査(堀ら, 1971; 玉井ら, 1974)に関して検討が加えられた。さらに、行動変容手続きによる集団化における強化スケジュールの適用、教師対生徒の比率、集団規模の漸次的、段階的拡大等の教室場面における自閉症児の教授に効果的な諸種の手づきについての一連の研究が報告された(Koegel & Rincover, 1974; Rincover & Koegel, 1976; Koegel et al, 1977)。

筑波大学知能障害研究室において、自閉症状を示す障害児に対して、行動療法的観点に立ち、小林・門脇(1973)の5段階5領域の治療教育システムの適用が進められてきた。そして、幼児期自閉症に関する一連の治療教育のプログラム及び指導過程の成果の報告がなされた(小林, 1977; 池ら, 1978; 近藤ら, 1978)。又、門脇・黒木ら(1978)は、学校教育との関連を重視した6領域の学習を提案した。

本研究室では、学齢期に達した自閉症状を示した児童の就学上の問題に焦点をあわせると同時に、就学前の本研究室での治療教育の有効性についての検討の一助

とする目的で追跡研究が行なわれた(板垣ら, 1979; 杉山ら, 1979; 近藤ら, 1979)。

先の研究(近藤ら, 1979)において、初診時には対人関係障害を中心とする自閉症状が認められたが、訓練経過とともに、自閉症ではなく知的発達の遅れ等の問題を持っていることが明らかとなった児童(小学1年生)を対象に追跡研究がなされた。その中で、特に学習面と集団適応の問題に関して考察された。そこで、本研究では、先の研究で示唆された問題点及び新たに現出された問題点に関して、1年後の追跡研究として検討を加えるものである。

## II 方 法

1) 対象児(昭和54年9月現在)

<症例1> T.M.児, 男児, 昭和46年12月生。  
7歳9カ月。

インテーク: 昭和51年9月。

学級の種類: 普通学級(昭和53年4月入学)。

<症例2> K.Y.児, 男児, 昭和46年9月生。8歳  
0カ月。

インテーク: 昭和51年6月。

学級の種類: 普通学級(昭和53年4月入学)。

<症例3> M.S.児, 男児, 昭和47年3月生。7歳  
6カ月。

インテーク: 昭和52年5月。

学級の種類: 普通学級, 週2時間, 情緒障害学級  
(昭和53年4月入学)。

<症例4> M.N.児, 女児, 昭和46年8月生。8歳  
1カ月。

インテーク: 昭和50年6月。

学級の種類: 特殊学級(昭和53年4月入学)。

<症例5> H.T.児, 男児, 昭和46年8月生。8歳  
1カ月。

インテーク: 昭和52年4月。

学級の種類： 特殊学級（昭和53年4月入学）。

## 2) 調査方法

チェック・リストによる追跡調査（T-CLAC，言語発達，行動変容，適応行動尺度（注2）は母親，学校適応，学習適応は担任が記入）及び学校訪問による担任との面談，授業参観から得られた資料をもとに検討していく（注3）。

## Ⅲ 症 例

〈症例1〉 T.M. 児，男児，昭和46年12月生。7歳9カ月（昭和54年9月現在）。普通学級在籍（2年生）。

1. 主訴：ことばの発達の遅れ。落ちつきがない。

2. 訓練経過

i) 昭和51年9月～昭和52年4月，個人セッション，母子分離，学習態度の確立をめざす訓練を行なった。

ii) 昭和52年4月～昭和53年2月，個人セッションと集団セッション，言語訓練を就学準備のための訓練として集中的に行った。

3. 訓練終了時（昭和53年2月）の状態

訓練セッション中，本児は着席し課題にとり組むことができるが，飽いたり要求が通らないとひとり言が多くなり，時々，泣き出すことがある。課題面では，ひらがな・数字を読むことができ，概念的課題を果たすことができる。

4. 入級理由

親の希望および地区の小学校に特殊学級がなかったため，普通学級へ入級した。

5. 就学後の状態

就学後，1年生時（昭和53年7月）と2年生時（昭和54年9月）の本児の状態次の項目についてまとめる。

i) 言語発達

言語領域全般にわたる発達が認められる。特に，漢字に強い興味を示した。2年生時に発達が顕著である（表1-a）。

ii) 行動変容

社会的対人関係および他者との遊びの項目で発達が認められる（図1-a）。

iii) 学校適応

学校適応に変化が認められる（図1-b）。

iv) 学習適応

学習適応に変化が認められる（表1-b）。

v) T-CLAC（図1-c）。

vi) 適応行動尺度（図1-d）

## 6. 現在の問題点および考察

現在でも，物事へ固執する傾向が強い。いつも本児の頭の中は，“漢字”のことでいっぱい，他のことへはあまり関心を示さない。発達の仕方アンバランスがあり，学習面では全般的に遅れが目立つ。また，他者へ自分の意志を十分に伝えることができないため，ひとり言が多く，時々，状況に合わない行動が出現するなどの問題が残っている。

しかしながら，本児の学校生活への適応は確実に良くなってきている。今では，かなり自分だけで身辺処理ができるようになり，集団の中でも，列を乱したり勝手な行動をとることはない。他児の行動をよく見ていて真似たり，時々自分から物事に挑戦しはじめてきている。また，本児の漢字に関する年齢水準以上の能力は，大いに，他児の賞讃を得る所となっている。このように本児の学校生活への適応性を高めた要因としては，われわれは，まず，本児自身による発達の促進を推察できるが，それにも増して，本児を受け入れていった担任教師の理解ある指導と良好な友達集団の存在を忘れてはならないと思われる。

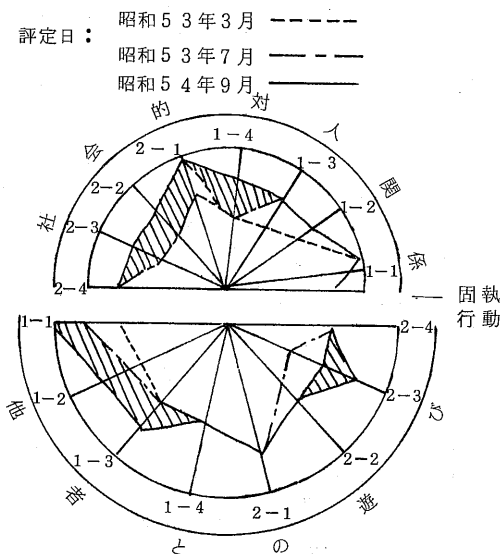


表 1 - a

言 語 発 達

昭和53年3月  
昭和53年7月  
昭和54年9月

段 階 領 域	1	2	3	4	5	6	7	8	該 当 項 目 (S. 54.9 現在)
話 す									身近な出来ごとについて場面に応じた話ができる
聞 く									言葉の指示によって、習慣的なことばかりでなく、ある程度柔軟に応じられる。
書 く									難しい漢字をよく知っていて、それを書くことができる。
続 む									学年以上の漢字を書くことができ、文章の内容もある程度理解できる。

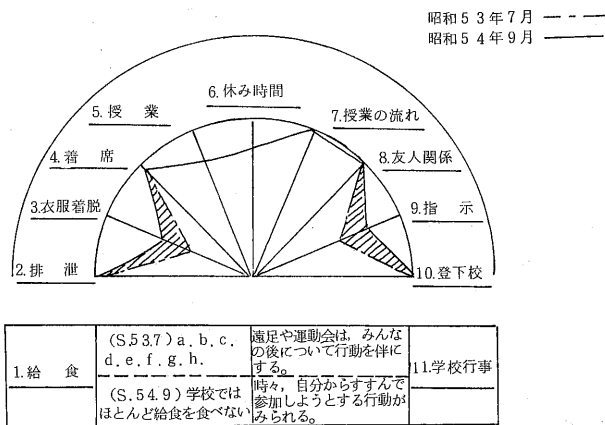


図 1 - b

## T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE 1

インタビュー  
昭和53年7月  
昭和54年9月

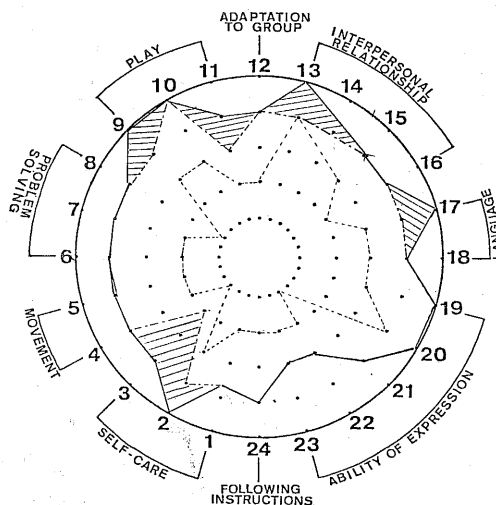


図 1 - c

表 1 - b

数	S. 53. 7.	2 位数の数があり、5 までの加減ができる。色・形（3 原色、○△□）の弁別ができる。月日、曜日がわかる。
量	S. 54. 9.	
自	S. 53. 7.	
然	S. 54. 9.	
社	S. 53. 7.	自分の名前が言える。
会	S. 54. 9.	担任や友達の名前が言える。
国	S. 53. 7.	要求や場面にもとづくことばはわかる。一語文が言える程度、ひらがな文字の文章が読め、書くことができる。
語	S. 54. 9.	あいまいだが単語が言え、適切なあいさつができる。かな文字が読め、文字を見て書くことができる。興味ある漢字が読め、書くことができる。
表	S. 53. 7.	なぐりがきができる。紙や粘土をちぎったり、まとめたり、押したりする。
現	S. 54. 9.	限られた歌の一部を歌うことができる。
体	S. 53. 7.	自分勝手に走る。胸位の深さのプールを歩きまわる。マットに横になる。低いとび箱を歩いてこえる。鉄棒をにぎることができる。
育	S. 54. 9.	セパレートコースで 50 m を走れる。胸位の深さのプールを歩きまわる。低いとび箱を歩いてこえる。鉄棒をにぎることができる。

第 1 部 領域標準点プロフィール

T. M. 児 (MIL II)

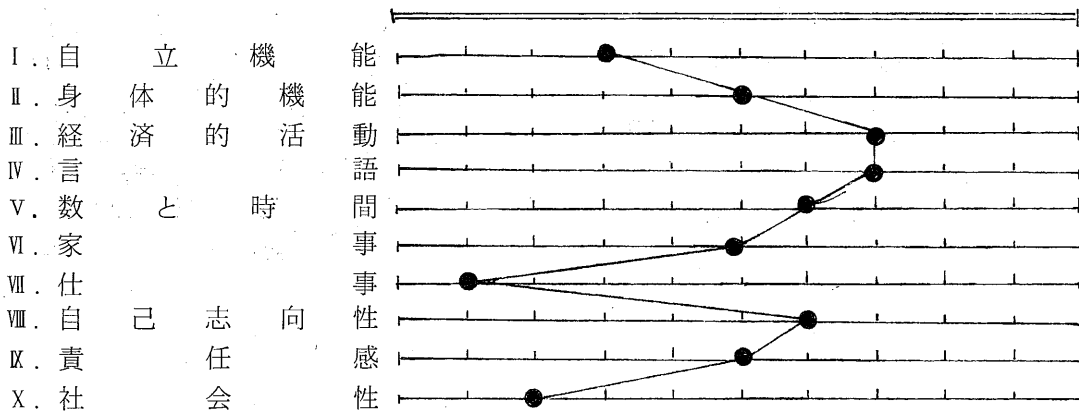


図 1 - d

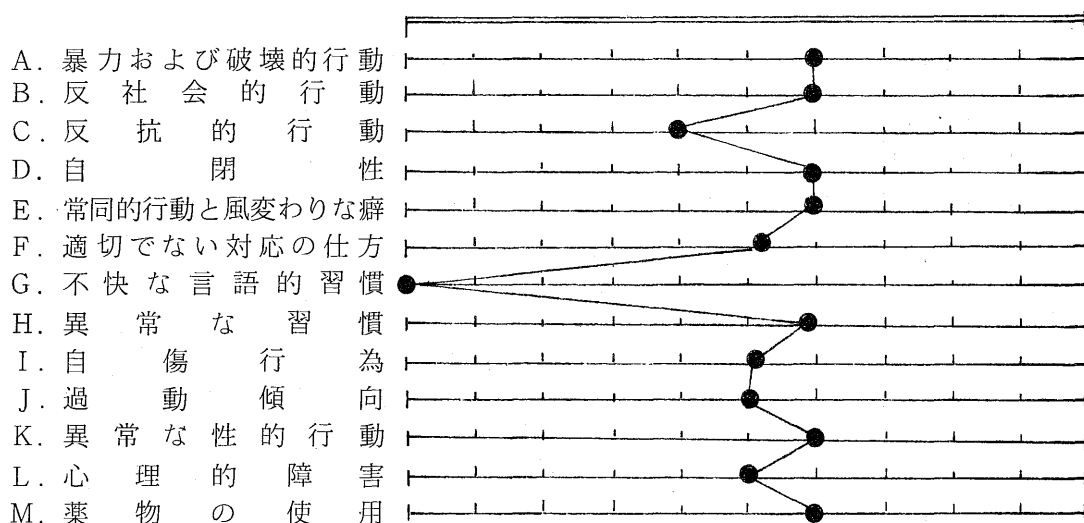


図1-d

<症例2> K.Y. 児，男児，昭和46年9月生。8歳0カ月（昭和54年9月現在）。普通学級在籍。

1. 主訴：幼稚園で他児の仲間に入れない。落ちつきがない。言葉が少ない。

2. 訓練経過：昭和51年6月～昭和53年3月。学習態度の確立から訓練をはじめ、①書く能力、②絵画能力、③話す能力、④数概念、⑤読む能力などの学習、そして⑥普通学級就学を目標として小集団グループによる適応訓練などを経験した。

3. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態：行動面、言語面などがかなり改善され、課題学習中は席に座って作業ができるようになり他の人とかなりスムーズに会話ができるようになった。

4. 入級理由：本研究室へ通うようになるまでは、言語面の不適切さ、行動面の落ち着きのなさが幼稚園で目立っていたため、特殊学級入級も考えていたようである。しかし、訓練に伴い改善されてきたため、普通学級入学へ踏み切った。入学に際しては特に問題はなかった。

5. 就学後（昭和54年9月）の状態

#### i) 言語

言語発達については、言語発達チェックリストは上限に達したので、ITPAを使用した。ITPAによる言語発達年齢は5歳8カ月。IQ値に比して低い発達年齢を示している（図2-a）。

#### ii) 行動変容

兄が自閉症児であり、本児をたたいたりつねったりしていじめることが多く、適切な兄弟の交流がとれない。そのため、1-2、2-2のような兄弟関係にだけ落ち込みが見られる（図2-b）。

iii) 学校適応、iv) 学習適応に関しては、母親が本児の幼児期の発達の遅れ、本研究室での訓練について担任に伝えていないとのことなので、今回は調査を差し控えた。

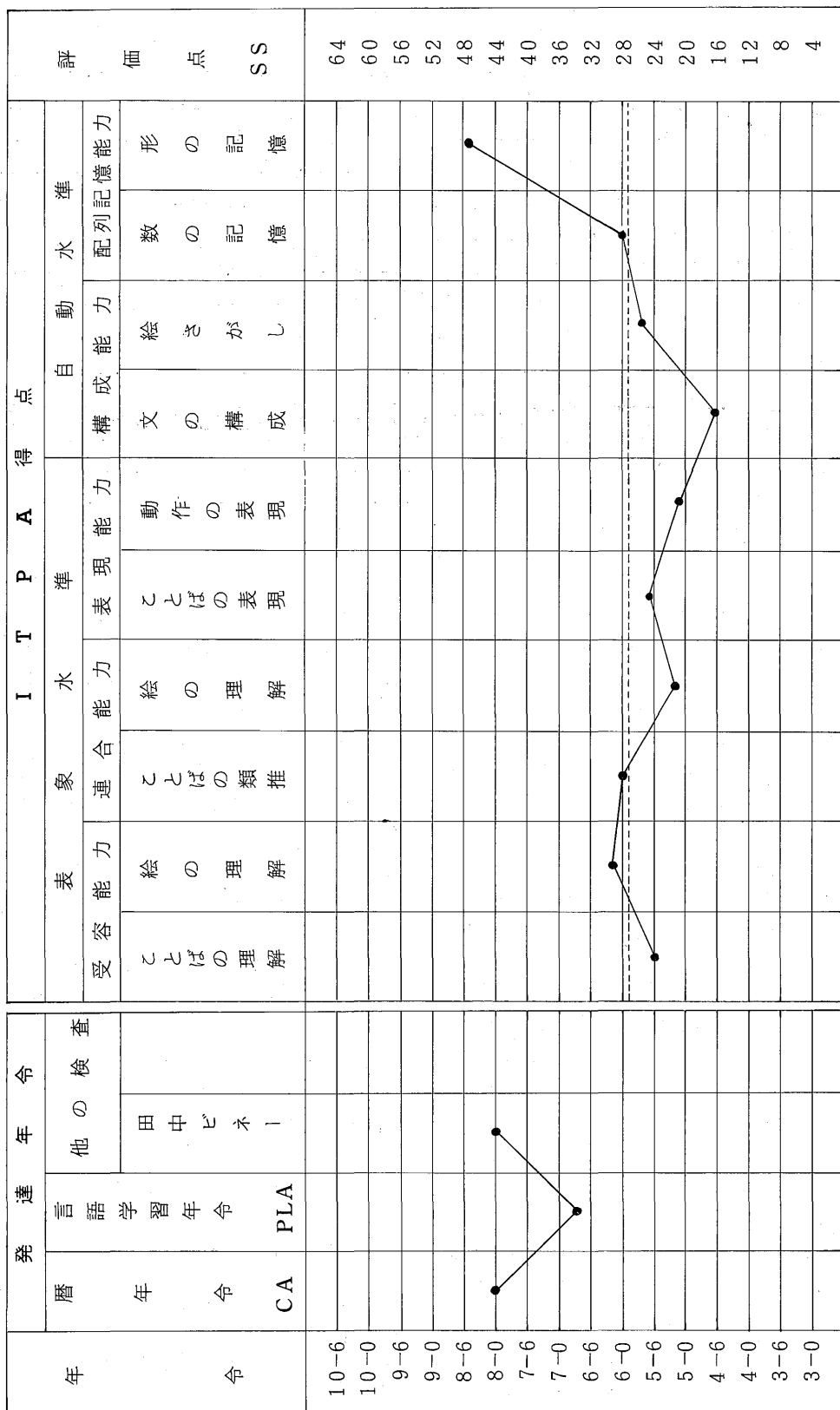
iv) T-CLAC（図2-c）。

#### 6. 問題および考察

現在も集団の中で多少落ち着きに欠け、注意を要する学習面や国語面などで苦手な分野もあるが、ほぼ能力面、行動面とも問題はないと思われる。勉強への自覚もみえはじめ、宿題が出ると自発的に「今日、宿題が出たから遊ぶ前にやっちゃうよ。」といった意欲的な態度が出てきている。ただし、2年生になり担任が代わり、新しい指導方針に対して本児がとまどっている面がみられているようである。

兄弟関係については、先の研究時点と同様、身体の大い兄（自閉症児、中学2年）にいじめられることが多く、兄弟関係の改善はみられていない。

なお今回は、母の希望もあり学校訪問及び担任との話し合いは控えたが、できるなら今後、担任と話し合う機会を持ち学校での学習面と集団適応面について具体的に把握したいと考えている。



PLA-5歳8カ月。  
経験によって不明瞭部分を予想する能力「文の構成」に落ち込みが見られる。これは、本検査においても本児の注意力の悪さが示されたものと考えられる。

図 2-a

## 行動変容

評定日： 昭和53年3月 ----- 退行  
昭和53年7月 -----  
昭和54年9月 -----

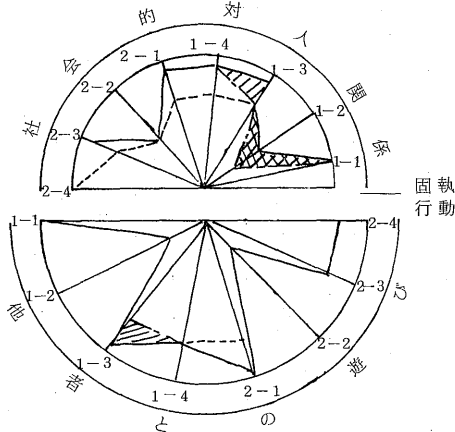


図 2 - b

## T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE 2

インテーク -----  
昭和53年7月 -----  
昭和54年9月 -----

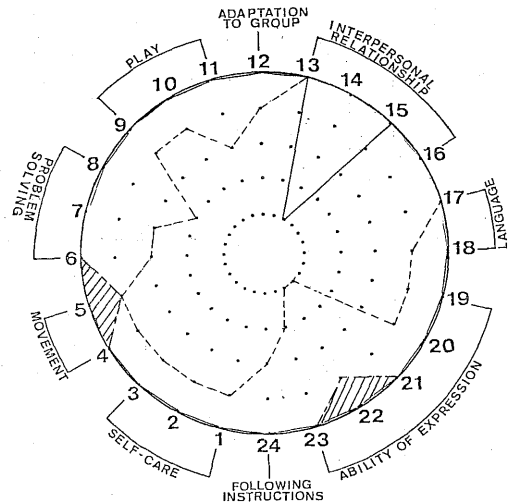


図 2 - c

＜症例3＞ M.S. 児 男児，昭和47年3月生。7歳6カ月（昭和54年9月現在）。普通学級在籍（週2時間，情緒障害学級通級）。

1. 主訴：ことばの遅れ。対人関係の障害。

2. 訓練期間：昭和52年5月～昭和53年3月。  
文字学習，ことばの学習，文の構成などを中心とした個別学習。

3. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態：正誤に対するこだわりが残る。助詞欠落，疑問詞がわからない。

4. 入級理由：本児の住む地域には特殊学級（特に，情緒障害学級）がないため，T市内の情緒障害学級併設の小学校に入級。

5. 就学後（昭和54年9月）の状態

### i) 言語発達

担任との1対1場面では，比較的適切な応答ができるが，全体への指示に対しては，1回でなかなか応じれず，本児に向けられても応答できない場合が多い（表3-a，図3-a）。

### ii) 行動変容

固執行動は1～4の項目でチェックされているが，それほど強いものではない。興味すると手をたたき，時に

は，歩き回る行動がみられたが（昭和54年3月），2学期になるとそのような行動の発生頻度は非常に減少してきた（図3-b）。

### iii) 学校適応

授業の流れでの問題点，すなわち，自分のみで何かに熱中するという行動が顕著にみられる。また，集団場面での指示に対する反応に難点を残している（図3-c）。

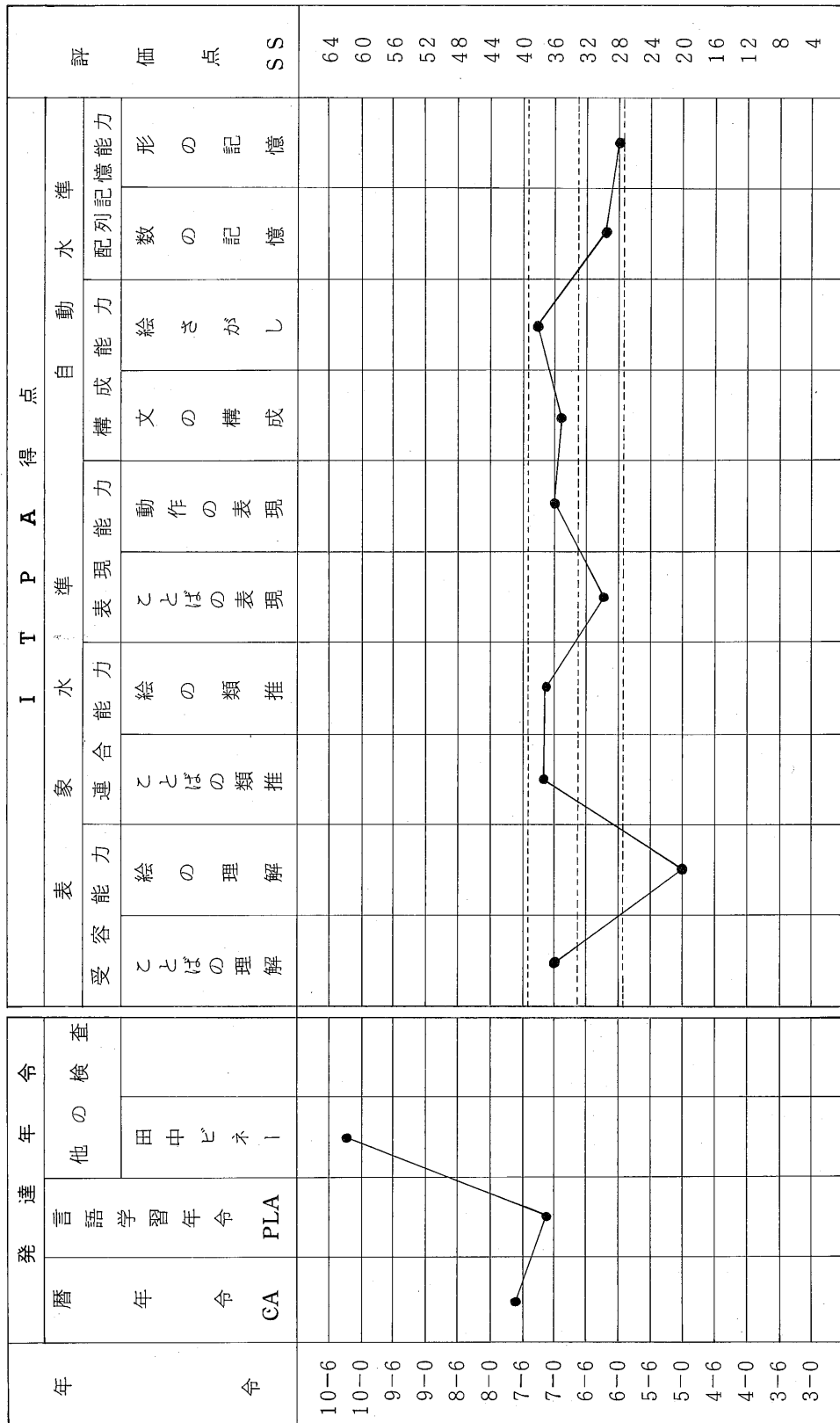
### iv) 学習適応

知的学習能力に対しては，他児と同等，あるいは，それ以上の能力を持っているが，集団場面になるとその能力を発揮できない。表現，体育は他児にくらべて遅れが目立つ（表3-b）。

### v) T-CLAC（図3-d）

### 6. 問題点および考察

個別学習場面において，耐性の低さがみられるものの，知的学習能力には，学年相当，あるいは，それ以上の能力を示している。しかし，授業場面になると，いくつかの問題点がみられる。例えば，指示に従えない。先生の話の先をとって発言する。机の上に道具を出さない。体育の時間には並んで待てないなどである。集団場面および生活全般に関してもいくつかの問題点が指摘される。



PLA-7歳1カ月  
「絵の理解」に落ち込みが見られ、記憶能力（数の記憶、形の記憶）も低い。これは記憶操作の障害を示しているといえよう。  
図 3-a



一般的に、1日に1～2回パニックを引きおとし、そのために授業の流れを乱すことがある。また、二次的要因として 母親の養育態度の不安定さが強く影響していると考えられる。集団場面の重要性が増大することと相まって、本児の不適応行動の頻度が増加している。現在、

普通学級および情緒障害学級で不適応行動に対して一貫した指導方針で対処がなされている。基本的には、望ましい行動の自発的な生起には強化を随半させ、行動の生起頻度を高めると同時に、不適切行動に対しては消去手続きを用いた指導がなされることが望ましいと思われる。

行動変容

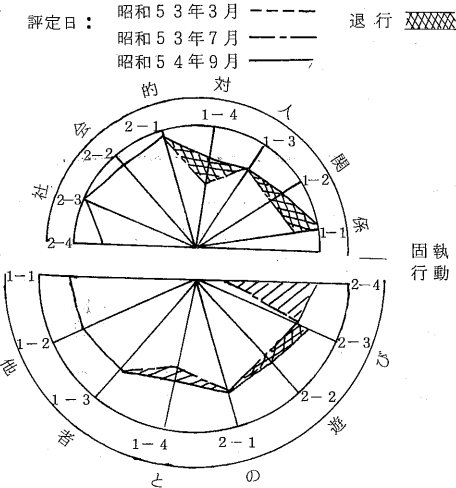


図 3 - b

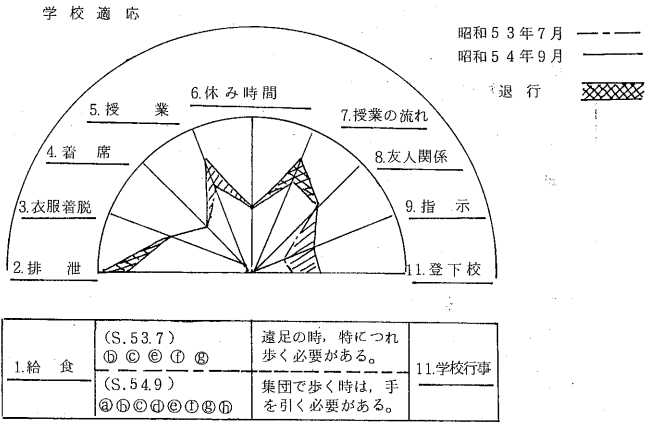


図 3 - c

表 3 - a 言語発達


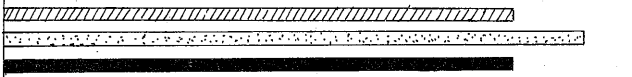
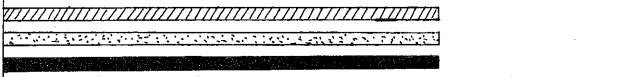
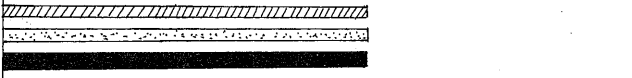

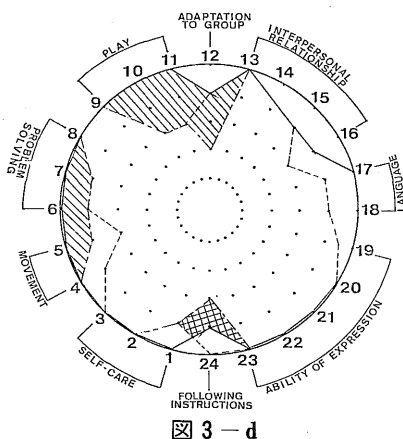
段階 領域									該当項目 (S.54.9現在)
	1	2	3	4	5	6	7	8	
話す									身近な出来事について話すことができる。
聞く									集団場面で本人のみに向けられたことばの指示に応じられる
書く									特別表記がかける。
続む									ひらがなを続けて続む。

表 3-b 学習適応

数 量	S. 53. 7.	学校のカリキュラムを他児と同様にこなせる。
	S. 54. 9.	学校のカリキュラム（小2の算数）は、ほぼ理解している。
自 然	S. 53. 7.	身近な動植物の名前、特徴は言えるが、それらへの感情表出は少ない。
	S. 54. 9.	動物の住んでいるところ、食べ物などがわかる。 記録を数や大きさなどでとれる。 雨水のゆくえなど、すじ道をおって考えられる。
社 会	S. 53. 7.	学校のいろいろな施設や用具が大体わかり、使える。
	S. 54. 9.	通学途上の学校のまわりの道路やたてものがわかる。 家の人の仕事に関心をもち、家の人の職業がわかる。
国 語	S. 53. 7.	話を最後までなかなか聞けない。身近な出来事について話せる。関心のある漢字は読み、簡単な日記、作文が書ける。
	S. 54. 9.	やり慣れた用事ならことばの指示でできる。身近なでき事について話せる。物語などの部分的なおもしろさがわかる。説明文の順序が読みとれる。考えていることを作文にできる。
表 現	S. 53. 7.	簡単なものなら、まとまって描いたり、作ったりできる。 歌を自発的に唱おうとしない。
	S. 54. 9.	簡単なものなら、まとまって描いたり、作ったりできる。 どうにかみんなと一緒に声を合わせて唱うことができる。 簡単なリズム打ちができる。
体 育	S. 53. 7.	1つの運動ならば模倣部分がみられ、全体的に簡単な運動はできる。しかし、指示にはなかなか従えない。 水泳に関して腰位の深さの所を歩きまわることができる。
	S. 54. 9.	1つの運動ならば、模倣部分がみられ、20m程度の距離を走れる。バトンタッチは気分によってできる。 マット横回り。とび箱一歩いてこえる。鉄棒一前回りおり。 ボールは近い距離での受け取り、投げる程度は可。

## T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE 3 インテーク ----- 退行   
昭和53年7月 -----  
昭和54年9月 -----



＜症例4＞ M.N. 児，女兒，昭和46年8月生。8歳1カ月（昭和54年9月現在）。特殊学級在籍。

1. 主訴：ことばがほとんどない。落ち着きがなく、いつも身勝手に動き回っている。つま先立ちで歩く。

2. 訓練経過：昭和50年6月～53年3月（2年9カ月）。着席，注視訓練から始められ，色・形・大小弁別・文字による絵カード弁別・トレーニング課題が行なわれた。

3. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態：着席して1対1の学習形態で指示に従う。色・形弁別可・音声と文字による絵カード弁別可。視覚的記憶に良好な反応を示した。トレーニング課題には，注意集中して取り組み，曲線や交叉も成功している。

4. 入級理由：母親が地域の養護学校および特殊学級見学を行なった後に、特に親の希望により現在在籍する特殊学級に入級した。

#### 5. 就学後の状態

##### i) 言語発達

顕著な変化はみられていない。わずかに、発語数が多くなったが、訓練終了時に興味を示したトレーニングが二年間の間に全く進歩がみとめられない(表4-a)。

##### ii) 行動変容

他者との遊び方に、前回と比べて落ち込みがみとめられる。現在は、同級の子とはほとんどかわりを持たない状態である(図4-a)。

##### iii) 学習適応

学校行事に著しい進歩がみとめられる。本児の在籍する特殊学級では、全体の流れについていけることが主な指導目的であったが、その成果であると考えられる(図4-b)。

##### iv) 学校適応

体育に参加できる種目が増加している。又、言語指示に従えることが多くなったため、適切に行動できる部分がふえている。担任の報告からも情緒面での落ち着きがみられることが指摘されている(表4-b)。

##### v) T-CLAC (図4-d)

##### vi) 適応行動尺度 (図4-d)。

6. 問題点および考察：学校という集団生活の中では、行動レパートリーは増加している。特に運動面では、技術的には未熟であっても、集団について行動することはできている。しかし、特殊学級全体の活動は時間が限定されているため、自発的な反応を待たないで次々に課題が進められていく。従って、本児のように知的遅滞が重度の場合、教室内での課題に対して、他児についていくことは困難であり、個別指導でなければ、十分な参加は不可能である。そのため、1年生1学期末にはできていた課題も現在ではできなくなっているものもある(トレーニング、色弁別など)又、現在でも、他児や担任教師とのかわりが全くない点も大きな問題である。

#### 行 動 変 容

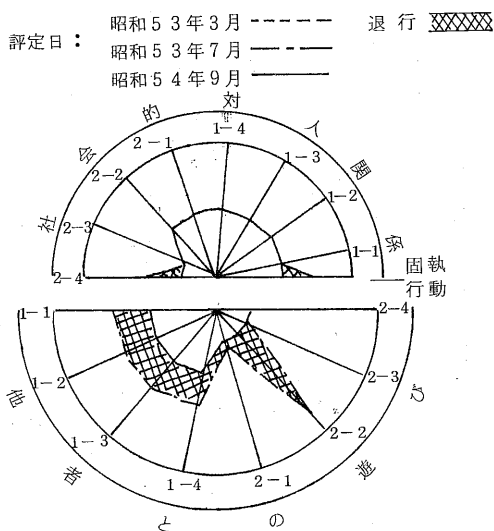


図4-a

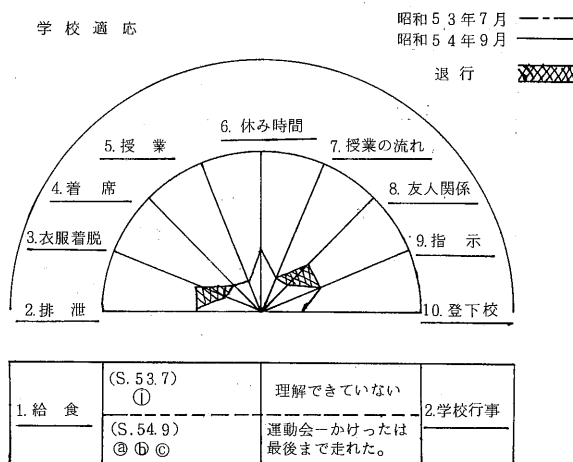





図4-b

表4-a 言語発達

昭和53年3月   
 昭和53年7月   
 昭和54年9月 

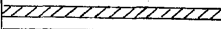
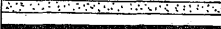
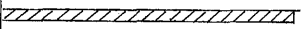



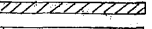


段階 領域	1	2	3	4	5	6	7	8	該当項目 (S.54.9現在)
話す									時々、場面に応じて二語文以上が使える
聞く									やり慣れた用事ならことばの指示でやれる
書く									書いても文字にならない
読む									特定の文字に偏った興味や固執を示す (CMや看板の文字)

表4-b 学習適応

数量	S.53. 7.	色と形の弁別ができる。
	S.54. 9.	1対1の対応操作ができる。
自然	S.53. 7.	
	S.54. 9.	かわいい動物を見てよろこぶ。
社会	S.53. 7.	呼名に対して返事がある程度できる。
	S.54. 9.	自分の名前が言える。
国語	S.53. 7.	時折、適切な単語がいえろ。 特定の文字を読む。 わずかの時間、簡単な指示に従える。
	S.54. 9.	やり慣れた用事なら言語指示に従える。 要求を無意味音声で表現する。 絵本などをめくって楽しむ。
表現	S.53. 7.	なぐり書きができる。
	S.54. 9.	紙や粘土を丸める。 音楽を聞いて喜びの表情を示す。
体育	S.53. 7.	
	S.54. 9.	一つの運動なら模倣できる。 ゴールまで走れる。 鉄棒を握る。 マットでは前回りがどうにかできる。

# T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE 4 インテーク ----- 退行   
 昭和53年7月 -----  
 昭和54年9月 -----

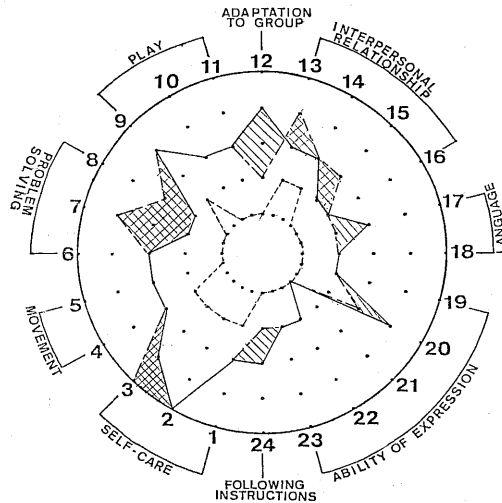
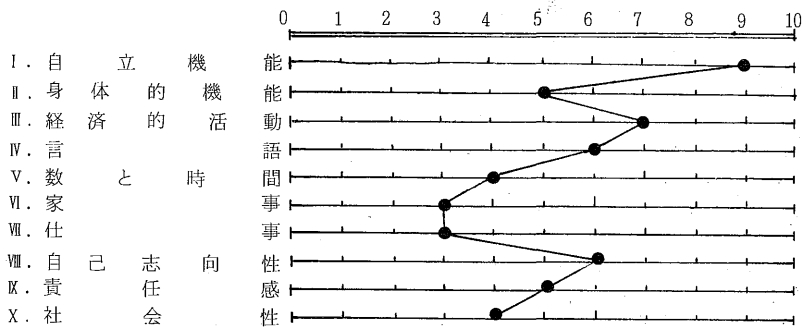


図 4-c

## 第1部 領域標準点プロフィール M.N.児 (MILTO)



## 第2部 領域標準点プロフィール

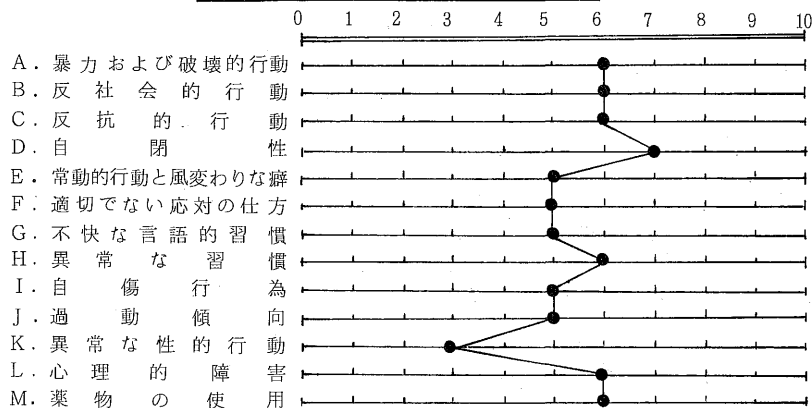


図 4-d

＜症例5＞ H.T. 児，男児，昭和46年8月生。8歳1カ月（昭和54年9月現在）。特殊学級在籍。

1. 主訴：ことばが出ない。落ち着きがない。
2. 訓練経過：昭和52年4月～昭和53年2月。

個人セッションで学習態度の確立のために基本的課題をすすめる。発語訓練を主目的としながら数積み木などによる数概念や、文字の練習など基礎的学習内容を課題としてすすめて来た。

3. 訓練終了時（昭和53年3月）の状態：電車など乗り物に関心を示す。積木を好み同色の積木を並べることに熱中する（構造的な特徴は見られない）。家庭、幼稚園では落ち着きがなく、集団生活から離れて行くことがしばしば見られた。一人で近くの公園へ行き、自転車、ブランコに乗って遊ぶことが多かった。母親が促さないと遊びに行こうとしない。フラフラと遊びに行くが、すぐ家にもどってくる状態であった。

4. 入級理由：ことばが出ないため普通学級での適応は困難と考えられたので、特殊学級へ入級した。

#### 5. 就学後の状態

##### i) 言語発達

語い数の増加の変化はないもののことばの指示に従うようになってきている。要求は文字表現ですることがみられるようになってきている（表5-a）。

##### ii) 行動変容

他者からの働きかけには応じるようになってきているが、自分から働きかけることは皆無である（図5-a）。

##### iii) 学校適応

身辺処理は確立されてきているが、学習時における基本的学習態度が身につけていない（図5-b）。

##### iv) 学習適応

数量、国語、表現において進歩は見られるが、体育などの集団行動を伴う学習に対しては適応が困難である（表5-b）。

##### v) T-CLAC（図5-c）

##### vi) 適応行動尺度（図5-d）。

6. 問題点および考察：担任は以下の4点を指導のポイントとした。①対人関係の改善（スキミングなど）②ことばかけを多くする ③受容的態度で接する ④本児のできる学習から他の学習へ拡大するよう努める。その結果、他人（教師・友達）からの働きかけに応ずるようになり、要求の質的变化がみられ行動面の落ち着きが少しずつ感じられるようになってきていると印象を述べている。しかし、現在でも発語は限定されており、使用頻度はあまり増えていない状態である。今後は、基本的

学習態度の確立、発語指導に重点をおきながら、学習範囲の拡大、集団行動への適応のあり方を検討していく必要がある。

#### 行 動 変 容

評定日：昭和53年3月 -----  
昭和53年7月 ----- 退行 XXXXX  
昭和54年9月 -----

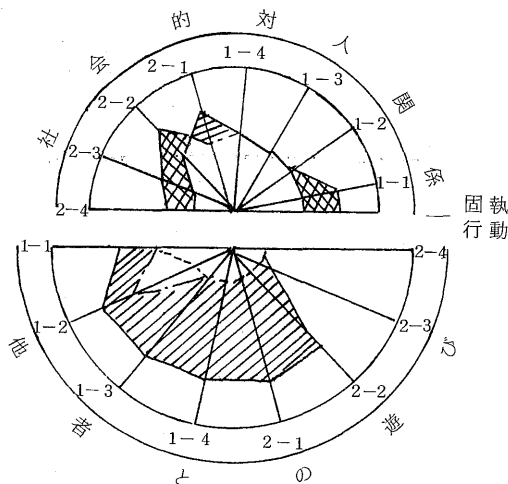


図5-a

学校適応  
昭和53年7月 -----  
昭和54年9月 -----  
退行 XXXXX

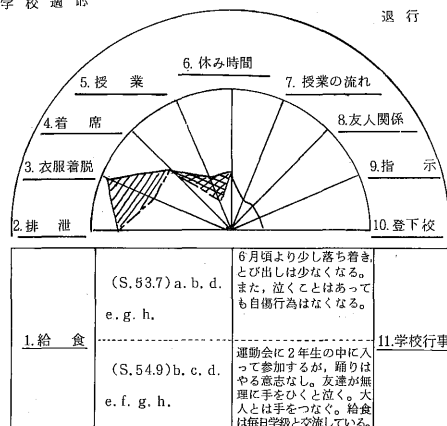



図5-b

# T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE 5 インテーク ..... 退行   
 昭和53年7月 .....  
 昭和54年9月 .....

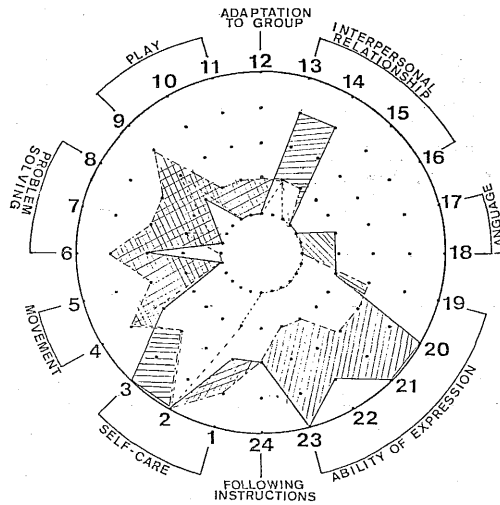
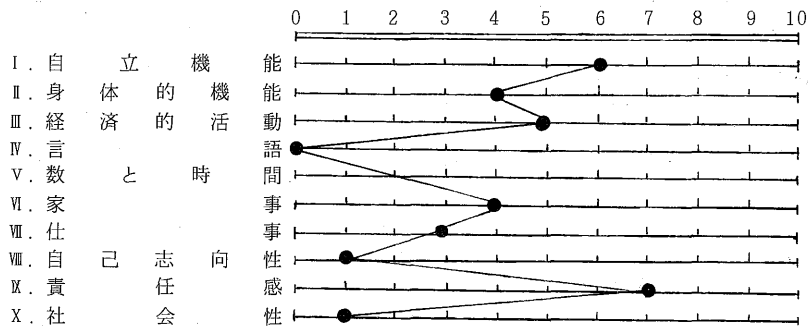


図 5 - c

## 第1部 領域標準点プロフィール H.T.児 (MIL I)



## 第2部 領域標準点プロフィール

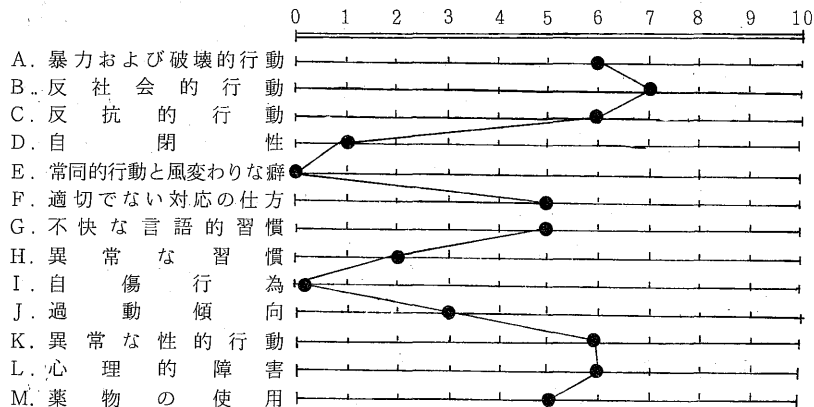





図 5 - d

表 5-a

言 語 発 達

昭和 53 年 3 月	
昭和 53 年 7 月	
昭和 54 年 9 月	

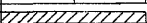
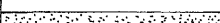

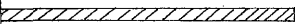
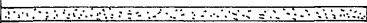





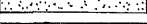

段 階 領 域	1	2	3	4	5	6	7	8	該 当 項 目 (S. 54.9 現在)
話 す									時々場面に応じた単語を発する。
聞 く									日常生活場面でのことばの指示には確実に応じられる。
書 く									特定の文字に偏った興味や固執を示す。 自分の名前が書ける。
続 む									特定の文字に偏った興味や固執を示す。

表 5-b 学 習 適 応

数 量	S. 53. 7.	1 対 1 (具体物, 絵カード) の対応操作は不完全。数字のなぞり書きができる。
	S. 54. 9.	数字は 1 ~ 5 まで読め, 1 ~ 10 まで書ける。身のもの, 色・形のちがいの弁別が可能。操作によって大小の比較ができる。月日, 曜日がわかる。
自 然	S. 53. 7.	動物・花などに関心を示さない。
	S. 54. 9.	動物・花などに関心を示さない。
社 会	S. 53. 7.	自分の名前を言えない。
	S. 54. 9.	「バイバイ」といいながら手をふる。 他人の教室に入ったり, 学校内外の危険な場所で遊ぶ。
国 語	S. 53. 7.	やりなれた用事ならば, レポートリーは狭いがことばの指示で行いる。要求を無意味音声で表現できる。
	S. 54. 9.	やり慣れた用事ならば言語指示で可。興味あるものは文字化できる。要求や無意味音声によって表現できる。絵本をめくって楽しむ。絵本の中のものをことばの指示で指す。
表 現	S. 53. 7.	なぐり書きができる。紙, 粘土などをちぎったり, まるめたり, 押したりできる。音楽には関心を示さない。
	S. 54. 9.	人物をそれらしくまとまったものを書く。 紙や粘土をちぎったり, まるめたり, 押したりできる。 音楽を聞いて喜びの表情を表わす。
体 育	S. 53. 7.	部位運動の模倣ができない。鉄棒は握れる程度。 胸位の深さのプールを歩きまわる。
	S. 54. 9.	部位運動の模倣できない。自然運動に興味を示さない。自分勝手に走ることはできる。 タイヤやとび箱などを跳びこす。胸位の深さのプールを走りまわる。固定遊具 (シーソ・ジャングルジム・平均台・ブランコ) ができる。) マット (横まわりの連続, 前まわりができる。) 鉄棒 (前まわりができる。)



## Ⅳ 総 合 考 察

本研究の対象児は全員、初診時には感情的な接触の障害、同一性固執などを中心とした自閉症状がみとめられた。しかし、訓練経過の早期に感情的な接触が認められるようになり、固執傾向も消失し、知的発達遅れのおよび言語障害が主症状となってきた。対象児を概観すれば、知的発達遅滞を背景にもち、言語表出に重篤な遅れをもつM.N.児、H.T.児、自閉的傾向が残っているものの知的発達遅滞が主たる症状として現われてきているT.M.児、行動面の改善と共に知的能力が正常値にまで伸びてきたK.Y.児、organic な基礎を呈し、学習障害的傾向の強いM.S.児と、その様相は各児で異なっている。

現在、小学2年生となり、小学1年時とは異なった形でいくつかの問題点が示された。今回は共通する問題として、1) 学習面の問題、2) 集団適応の問題があげられた。今回は、次の3点に関して考察する。

### 1) 言語発達

知的発達遅滞に関連して言語に主たる症状を示すのは、特殊学級に在籍するM.N.児とH.T.児である。両児とも入学時に比して顕著な変化は認められない。M.N.児は、訓練児に関心を示したトレーニングに全く進歩がみられず、個別指導の必要性が示唆された。一方、H.T.児は、言語理解力の着実な進歩を示した。簡単な要求が文字を媒介に表現できるようになり、これは、対人関係改善の手がかりを示すものである。ただし、発語の指導は、依然として中心課題である。T.M.児は、前回に比べ言語領域全般にわたる進歩が認められた。しかしながら、独語的な発語による回避傾向が依然として認められる。K.Y.児、M.S.児に関しても、比較的良好な言語発達がみられるものの、ITPA言語学習能力診断検査では、知能検査によるMAと比して言語面の遅れが認められた。

全般的には、M.N.児、H.T.児に対する個別指導形態の導入が望まれる。

### 2) 知的学習能力

M.N.児は、知的発達遅滞が顕著であることから特殊学級においても教科学習面で伸び悩みが認められ、1対1の個別学習指導の必要性が前回と同様に示唆される。H.T.児も数量、国語、表現に関して進歩がみられるものの個別学習による学習レポーターを拡大するとともに本児にあった学習指導形態を考える必要がある。T.M.児は、普通学級に在籍しているものの、全般的な遅れ

は顕著であり、知的学習能力の側面だけからみれば、前回でも指摘された通り、普通学級が本児の発達段階に適しているかといった問題が残る。K.Y.児、M.S.児ともに知的に進歩が認められた。K.Y.児の方は、教科学習面で、クラスの下位に位置するものの、2年生になってから学習への意欲がみられるようになった。しかし、担任の指導方針に対しての不調和が認められる。M.S.児は、授業場面において、不適切行動、注意集中度及び耐性の低さといった問題点を示し、それらの問題をいかに対処、指導するかが今後の課題といえる。

全体的に、M.N.児、H.T.児、M.T.児は、個別学習による学習上の問題点を見出し、そこから学習レポーターを拡大し、授業場面にまで般化させていく必要がある。K.Y.児、M.S.児は、知的学習能力に関して、普通学級での適応が比較的うまくいっている。しかしながら、K.Y.児では、学習面での遅れが今後予想されることから、個別学習指導の継続が望まれる。一方、M.S.児では、授業場面、集団場面で新たな問題が生じている。

### 3) 集団適応能力

M.N.児は、集団活動場面で特に顕著な問題行動は認められず、基本的学習態度も比較的良好である。集団適応能力は、相対的にみればかなり低いが、前回に比べれば、担任の指導の成果が認められる(例：学校行事面)。H.T.児は、言語理解に伸びがみられ、他人からの働きかけには応じられるが、自発的な働きかけが少ない。今後、自発的行動の頻度を高めると同時に、基本的学習態度の形成が指導上の課題であると考えられる。又、担任は、母子関係の問題を指摘しており、この点に関しても検討する必要がある。T.M.児は、前回に比して学校生活への適応は良好であり、身辺自立も自発的に行なえるようになった。又、集団の中で待ち、他児への注目ができるようになってきている。自発的行動もみられるようになり、担任の本児に対する理解ある受け入れと指導が集団適応の良好さの一助となっている。K.Y.児は、授業場面において、前回よりも全体的に落ち着きがみられるようになった。ただし、依然、注意を要するような授業場面では遅れが目立つ。このことは、団体式知能検査(IQ:40)が個別式知能検査(IQ:100)よりも極端に成績が悪いことからその特徴を示している。友人関係は比較的良好、遊びの場面にも自分から入って行くことができる。前回と同様兄弟関係の問題が集団適応に影響されることが懸念される。集団適応上の問題が最も顕著にみられたのは、M.S.児である。第1の問題と

して、就学前の小集団学習を経験していないことがあげられる。第2には 母親の養育態度が本児の行動に強く影響していると考えられる。それは、耐性の低くさに反映される。第3に、母親が学校に介入する場面が比較的多いことが、集団適応上の問題点と関連していると思われる。第4に、本児の行動上の問題に対する教師側のとまどいが認められ、かならずしも適切な処置、指導がなされていない。現在みられる不適切行動に対して、普通学級、情緒障害学級及び親との連携のもとに、問題の解決をはかることが望ましい。

全体的にみれば、M.N児、T.M児、K.Y児は、程度の差はあるにしろ、比較的良好な集団適応の改善が認められる。一方、H.T児は、基本的学習態度等の側面で、M.S児は、学習面よりも集団適応上の問題が指摘できる。

本追跡研究で明らかにされたように、治療室場面で処理しう問題点が存在すると同時に、学校教育との関連で積極的に担任と協力しながら解決をはからなければならぬ問題点も指摘できる。特に、学校での集団適応上の問題の比重が増すにつれて、治療室と学校教育の相互協力体制の確立が要望される。その意味でも、小林（1977）が指摘するように、治療室における行動療法的アプローチによる行動変容を一般化するためには、小学校の担任及び親と協力して、役割をそれぞれ分担することが重要である。この点に関しては、今後の治療教育の課題である。

注1) 現在、土浦小学校情緒障害児学級教諭。昭和53年4月から同年9月まで本学研究生として治療教育に従事。

注2) 本研究で用いた適応行動尺度においては、知能指数とその標準偏差（S D）から求められるMILが用いられる。K.Y児、M.S児は、MILO「普通」という段階に位置づけられるために、標準点換算表には記載されていない。

M・N（♀） 大脇式IQ 35

H・T（♂） 大脇式IQ 72

T・M（♂） 田中ビネーIQ 56

K・Y（♂） 田中ビネーIQ 100

M・S（♂） 田中ビネーIQ 136

注3) 調査は昭和54年4月及び9月に行なわれた。今回の報告は、9月の調査で得られた資料につ

いてまとめられた。

## 参 考 文 献

- 1) Brown, J. L.: Follow-up of children with atypical development (infantile psychosis). Am. J. Orthopsychiat., 1956, 26, 556-566.
- 2) Creak, E. M.: Children psychosis. A review of 100 cases. Brit. J. Psychiat., 1961, 109, 84-89.
- 3) Eisenberg, L., & Kanner, L.: Early infantile autism, 1943-1955 in childhood schizophrenia. Symposium 1955. Am. J. Orthopsychiat., 1956, 26, 556-566.
- 4) 堀 要・若林慎一郎・木村照夫・大井正己・金子寿子・石井高明: 自閉症児の治療と教育に関する研究 — 中部地区実態調査 — 児童精神医学とその近接領域., 1971, 12, 267-274.
- 5) 池弘子・小林重雄・太田千鶴子・伊藤健次: 自閉症児の指導過程に関する研究(2) — T-C-L-A-Cによる追跡 —, 心身障害学研究., 1978, 2, 109-118.
- 6) 板垣健太郎・山根律子・太田千鶴子・藤原義博・堀之内高久・池弘子・小林重雄・長畑正道・斉藤義夫: 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 I(2) — 自閉症児の普通学級適応についての検討 —, 心身障害学研究., 1979, 3, 101-109.
- 7) 門脇徹・黒木仁: 自閉性障害児の治療教育における情緒障害児治療教室の役割. 東北児童精神医学懇話会論文., 1978, 3.
- 8) Koegel, R. L., & Rincover, A.: Treatment of psychotic children in a classroom environment: I. Learning in a large group. J. Applied Behavior Analysis., 1974, 7, 45-59.
- 9) Koegel, R. L., Russo, P. C., & Rincover, A.: Assessing and training teaching teachers in the generalized use of behavior modification with autistic children., J. Applied Behavior Analysis., 1977, 10, 197-205.

- 10) 小林重雄：自閉症児の行動変容 —— クリニック  
と他機関との関係に関する諸問題．行動療法研究．，  
1977，2，27-33．
- 11) 小林重雄・門脇徹：5段階5領域治療教育システム．  
東北心理学会大会発表論文集，1973．
- 12) 近藤明子・太田千鶴子・小林重雄：自閉症児の集団  
適応に関する研究．第18回教育心理学会大会発表  
論文集．，1978．
- 13) 近藤明子・高杉紀久子・伊藤健次・竹花正剛・井口  
裕子・小林明・池弘子・小林重雄・長畑正道・齊藤  
義夫：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する  
追跡研究Ⅰ(4) —— 自閉症状の消失した障害児につ  
いて —— ， 心身障害学研究．，1979，3，  
121-134．
- 14) Rincover, A., & Koegel, R. L. : A  
research based model for the  
education of autistic children, distribu-  
ted at the International Symposium  
on Autism : Reappraisal of Concepts  
and Treatment, July, 12-24, in  
Switzerland, 1976.
- 15) Rutter, M. : The influence of  
organic and emotional factors on  
the origins, nature and outcome  
of childhood psychosis. Develop.  
Med. Child. Neurol., 1965, 7,  
518-528.
- 16) Rutter, M., Greenfeld, P. & Lockyer,  
L. : A five to fifteen year follow  
- up study of infantile psychosis,  
II. Social and behavioral outcome.,  
Brit. J. Psychiat., 1967, 113, 1183  
-1199.
- 17) 玉井収介・遠藤園子・行重和子：特殊教育と情緒障  
害 —— 情緒障害教育に関する実態調査 ——  
国立特殊教育総合研究所．，1974，1，19-32．
- 18) 杉山雅彦・反保真弓・田中裕子・張正芬・池弘子・  
小林重雄・長畑正道・齊藤義夫：自閉症状を示した  
障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅰ(3)， 心身障  
害学研究．，1979，3，111-120．
- 19) 内堀照夫：普通学級の中での自閉症児の指導．精神  
薄弱児研究．，1968，123，32．
- 20) 若林慎一郎・石井高明：自閉症児の学校教育につい  
ての研究．精神医学，1969，11，543-549．
- 21) 若林慎一郎・石井高明：自閉症児の学校教育につい  
ての一考察．児童精神医学とその近接領域，1970，  
11，129-143．
- 22) 若林慎一郎・水野真由美：自閉症の予防についての  
研究，1975，16，177-196．
- 23) 横沢 靖：特殊学級の中での自閉症児の指導．精神薄  
弱児研究，1968，123，38．

## Summary

### The Follow-up Studies Concerning School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms

#### —Handicapped Children Whose Autistic Symptoms have Improved—

Seigo Takehana, Akiko Kondo, Hiroko Iguchi, Fujitoshi Cho,  
Yasuyuki Koga, Katsuyo Shiba, Kikuko Takasugi, Hiroko Ike,  
Shigeo Kobayashi

This is the second report of the follow-up studies to find out the more effective program before entering school and the way to make more adequate participation into the present classes. Several check-list have been used in order to evaluate the present state of the subjects in comparing with those reported before.

The subjects manifested some of so-called autistic symptoms at their intake period. Through the training, their symptoms have been modified to various orientations, normal-likes, hyperkinetics and mental retardation.

Each case is as followed:

Case 1. T. M. (7ys. 9mos., male, regular class)

Intake: Retardation of speech. Distractiveness.

Training period: Sep., 1976—Fed., 1978.

Problems (Sep., 1979): Retardation of academic learning.

Case 2. K. Y. (8ys. 0mos., male, regular class)

Intake: Maladjustment in the classroom. Distractiveness.

Retardation of speech.

Training period: Jun., 1976—March., 1978.

Problems (Sep., 1979): Retardation of academic learning.

Case 3. M. S. (7ys. 6mos., male, regular class)

Intake: Retardation of speech. Disturbance in interpersonal

relationship.

Training period : May., 1977—March., 1978.

Problems( Sep., 1979): Maladjustment in the classroom. Weak frustration tolerance.

Case 4. M. N. (8ys. 1mos., female, special class )

Intake : Retardation of speech. Distractiveness.

Training period : Jun., 1975 — March., 1978.

Problems( Sep., 1979) : Retardation of academic learning. Retardation of speech.

Case 5. H. T. (8ys. 1mos., male, special class )

Intake : No spontaneous speech.

Training period : April., 1977 — Fed., 1978.

Problems( Sep., 1979) : Problems of speech and maladjustment.

The results of follow — up study were discussed with regard to three points as follows;

- (1) Language development.
- (2) Mental functioning and academic learning.
- (3) Adjustment in the classroom.

(1) Language development.

Case 1 has shown gradual improvement on speech and comprehension, though case 4 and 5 show little modification of them. It should be strongly advisable to introduce case 4 and 5 individual training. In case 2 and 3, they have shown relatively good language development in regular classes.

(2) Mental functioning and academic learning.

Except for case 2 and 3, all subjects have shown a variety of problems in academic learning. For example, case 1 has severe difficulty in academic learning. Therefore, it should be recommended to have individual training as have had with case 4 and 5. It seems, however, to have some problems in academic learning in future.

(3) Adjustment in the classroom.

Case 3 and 4 have shown some inadequate behaviors in the classroom. The former is for learning attitude and the latter sometimes acts out inadequately their own classroom.